
キャットセンス

夜空 透月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャットセンス

【Nコード】

N2200Z

【作者名】

夜空 透月

【あらすじ】

「不思議な力を使おう！」

そう決めたきっかけがある事件である

とっても可愛い幼なじみの女の子「雨品 琴音」（あましな ことね）

彼女のことを異性として認識しないで、

ずーっと昔のように過ごしていた主人公「姫流猫 流神亜」（ひめ

るびょう るしあ)

ある日流神亜は風のいたずらで彼女のパンツを見てしまう

それから琴音は主人公のことを避けて生活するようになってしまう

流神亜はこの状況をなんとかできるのだろうか。

第一話 始まり、それは風（前書き）

えーっと、超能力とは言っても、残酷な評者は入れません。
能力的にもそんなことはできませんし（笑）

それと能力はまだ出てきません次で出しますのでゆるしてください

第一話 始まり、それは風

僕は不思議な力を持っている。

僕だけの力

だけど今は不思議な力の話よりも幼馴染みの話を聞いてほしい。

そう、きっかけは風だ。

運命のいたずらなのか、風が彼女のスカートを……

白だった。

彼女がスカートを押さえてこちらを見るまでの動作が恐ろしく可愛い。

黒く美しい髪が長く風でゆれ、

目もパツチリしていて。

スタイルもよい。

そして顔を赤くしている。

例えるならすべてを許せるような可愛いさだ。

僕はこの瞬間、幼馴染みに恋をした。

最初にあつたのは小学2年生の時、

彼女は親の仕事の都合で僕の家の隣に引っ越して来たんだ。

髪が長くて、笑顔が可愛いかった。

その時は、ただ純粹に可愛い子だなーっと思った。

家も隣だから毎日遊んだ。

公園で一緒にブランコ乗ったり砂遊びしたり、滑り台も楽しかった。

た。

そして彼女は僕と同じクラスに転入してきた。転入生と、いつても春休み中の転入。特に騒がれもしなかった。

そのまま3年の時が過ぎ五年生。

この年になるとみんな異性を気にし始める頃。クラスメイトは彼女の事を可愛いと言うけど、いまいちピンツと来なかった。

わかりきったことを今さら言われてもって感じた。

そして中学3年生の夏。

通学中に幼馴染みの姿が見える。

俺は彼女に追いつこうと駆け足で走り声をかける

ただ友達として、幼い頃からの親友として

だけど運命は優しいのか残酷なのか
初めて彼女の魅力に気づいた。

気づいてしまった。

きっかけは風だ。

僕は幼馴染みの可愛いさに気づかせ、

運命の風。

僕の物語はここから始まる。

恋の物語が

少しの時間が流れた。

僕は呆然と立ち尽くしていた。

数秒だった、だけれど物凄く長かった。

「みた………？」

「え、いや、その、」

ど、ど、どうしよう、こじは見えないって言う方がいいのかな………？

「見たのね!？」

「ごめんなさい！」

は！ヤバイ！

そう思った時には遅かった。

「ううー」

き、気まずい、

どうしよう、

そ、そうだ！誉めればいいんだ！

よ、よし！

「白色ってめっちゃ可愛いね！」

よし！言ったぞ！これで何とかなるはず！

…っ！よく考えたら逆効果じゃないか！？ 待ってください！

他意はないんです！

と、言おうと思った瞬間は、時すでに遅し

「ばかああ！」

カバンを投げられた。

ヒューーと、言う頼りない音からしたら想像もつかない速度で

それは見事に目の辺りに激突した

僕はそのまま地面に倒れこんだ。

「い、痛い」

少しの時間が過ぎ、場所は学校

教室に入ってもまだ目元がひりひりする。

ダメージがきつくてしばらく目を回していたぐらいだ。

そんな哀れな僕は中学3年生

名前は『姫流猫 流神巫』

とても難しい漢字をしているから読めない人も多い。
けれどももう間違えられるのはなれた。

そして幼なじみの名前は『雨品 琴音』

俺も本当の魅力に気づいたのは今日だけど、
ずっと前から人気があったのは知っていた。

今思うとなんとも思わなかった自分が不思議でたまらない。

幼馴染みって言うのは盲点だったのかな……？

そして一番の問題。

幼馴染みは朝の事件から何となく僕を避けている。

いや、理由はわかっていているけれど

まだ少しだけただ忙しいと言う淡い願いも持っている

「どうしたんだ？」

と、『要 桜夏』が話かけてくる。

こいつは僕の悪友みたいな感じ

「いや、今朝さ」

ん？ まて？ こんなこと言っているのか？

こいつに言ったら絶対に広められる。

うん、やめておこう

「元気ないな？ よし！ 俺が取って置きギャグをしてやろう
」！

妙に気が利く、あやしい

こいつはいつもこんな感じじゃないのに

アヤシイ

「ふっふっふ……」

桜夏は自信満々にあの伝説の言葉をいう。

「布団が吹っ飛んだ！」

一瞬で氷河期が来たみたいに空気は凍りつく。

よっぽど自信があったのか、「満面の笑み」を浮かべている

だけど、僕も含めてこの教室にいるほとんどの人が凍りついてい
る。

ここは突っ込んであげよう。

いつか借りを返してもらうために

僕は懸命にこの状況に助け舟を出してあげた。

「そのギャグあんまり面白くないよ！」

この空気を完全に元に戻すことはできない

だけどせめて回復を早めてあげようと思った。
だからわざわざ助け舟を出したのに

「お前よりは面白いぞ」

なんでこんな言葉が返ってくるのだろう。

僕は不満を口にだした。

「ええ！？ 女々しい苗字の癖にエグイこというね！？」

「女々しいは余計じゃ！ そもそも苗字は関係ないだろおお！」

「なら何で人がイラつく事を言うのさ！」

せつかく助けてあげようと思ったのに！

「一回この手のギャグをやってみたかったんだ！」

「もうどこから何処までがギャグなのかわからないじゃ無いか！」

「！」

要と疲れるやり取りをして、教室から出ると丁度良く琴音が廊下を歩いてきた。

「おい！ 琴音！」
そうやって琴音に声をかけた。

「!？」

琴音は俺から少し距離をおく

そして反応で避けている理由がはつきりする

残念だ

「いや、今朝はごめんな？」

謝ればとりあえず許してくれるはずだ！

琴音はそういつやつだ

「いやだ……」

ええ！？ なんで！？ なんで？！

いつもと違う！？

どうすればいいんだ…

とにかく弁解の余地を作るために僕は思った事をそのまま言った

「あれは、事故だよ！ 許して！」

必死で謝ればきつと許してくれる！

昔からの馴染みなんだ！きつと！

しかし彼女は顔を真っ赤っかにしながら

「だ、駄目……!!」

と、答えた

どうしよう、許してくれそうにない。

考えるんだ！ 僕！

どうすればいいんだ！？

わからない、

少し悩んでいい事を思いつく

わからないなら聞けばいいじゃないか！

なんでこんな簡単なことに気づかなかったんだろう！

「ど、どつすれば許してくれる！」

言い出すのにすごく緊張した

ずるい気がするけど今はこれしかない！

「そのぐらい…！ 自分で考えてよ…！」

「え、ちよつとまって！」

琴音は、けして大声とは言えないおおごえで言い捨てると
すたすたと歩いていく。

僕を切り離すように

これ以上追っても逆効果だと思った。

でも僕は諦めない

何とかして今までの関係を取り戻したい。

正直言えばその先にも行きたい

でもまずは足場固めに今までの関係を取り戻さないといけない

そのために僕はある考えを思いつく。

一番いい方法があるじゃないか！

僕にしか使えない特別な力が！

第一話 始まり、それは風（後書き）

キャラクター説明

名前 姫流猫 流神亜

読み ひめるびょう るしあ

詳細 不思議な力がある

それを利用してちよつとあくどい作戦を立てる

成績は危ないほうだが、進級できるラインにいる

パンツを見てから幼なじみに異性としての興味を持つようになる

名前 雨品 琴音

よみ あましな ことね

詳細 主人公の幼馴染み、恥ずかしがりやで和風美人

主人公以外の異性とはあまり関わりがない

実は異性が苦手であまりかわりを持たなかった。

主人公は幼馴染みだったから大丈夫だったがパンツを見られてから

他の異性同様、苦手になった

名前 要 桜夏

読み かなめ おうか

詳細 主人公の悪友 それしか言い様がない

親父ギャグを好んでいる

正確には親父ギャグで空気が凍るのを好んでいる

第二話 シェアリンク(前書き)

今回で初めて能力が出てきます。
でもちよつと受け狙いでいきました

第二話 シェアリンク

「ただいまー」

いつもと違い一緒に帰ってくれなかった琴音。

そんなさびしい僕は仕方なく一人で帰って来たのだ

やっぱり避けられることはなんとかしたい。

なんとか今までの関係を取り戻したい。

その後のことも今は後回しにしよう

「あ、おにい〜おかえり〜」

リビングに飲み物を飲みに行くとき妹の璃波りながテレビを見ながらそう言った。

ん？ 珍しい・・・母さんがいない

「お母さんはなにかの用事？」

まあ、遅くなる場合はコンビニとかでご飯を買えばいいかな

「うん、何の用事か知らないけど、冷蔵庫の物で適当に作ってだ
って」

うわ……自炊しろと言うんですねお母様

だけど今日は作戦のために料理に回している時間がないのだ
仕方ない、妹に交渉しよう

「久しぶりに璃波の手料理を食べたいな〜」

よし！ まずは完璧だ！ 次に徐々におだてて

「一昨日たべたじゃん」
クツ、手強い、確かに一昨日食べたんだっただ、どうしよう、忘れてた

警戒されちゃったなこれは

「ええー残念だなー！ 璃波の料理食べたかったのにー」
「ただ僕はくじけない！なんとかするため」

「私コンビニ弁当で済ませたし」

くそお！！ こいつ地雷まで仕掛けたなあ！？

これで冷蔵庫減ってなかったら怒られるじゃないか！？
母さんはなぜ僕にしか怒らないんだぞ！？

そ！ そうだ！ 俺には武器がある！ 本当は後で食べたかったんだけど仕方ない！

「ここに今日新しく発売した、とあるケーキ屋のショートケーキがあるんだけど」

「フラワースイーツの！？」

よし、食いついてきた。『フラワースイーツ』のケーキだ、絶対に食いついてくると思ったよ、

昨日からずっと新商品のショートケーキを食べたい言ってたからね

「そっだよ！よく分かったね！おなか一杯ならこれ食べれないかも知れなかったけど今日はこれだけでいいか！」

「もう！しょうがないな、おにい！ そんなんだからシスコン呼ばれるんだよ！ 私が作ってあげる！」

買収完了、本当は能力を使った後の楽しみにとつといたのに、仕

方ない。

ついでに誤解を与えないために言っけど、周りからはシスコンと呼ばれていないよ。

「ありがとう璃波！ んじゃあきつとこのケーキ食べきれないからあげるよ！」

ああ……俺のお菓子……

しかし母さんの説教を免れて助かったのだ、それでも安くはない犠牲だった。

「うん！ ありがとう！ 帰りに行ったときには売り切れで落ち込んだの！」

そりゃそうだ、フラワースイーツは人気が高いから新発売だったらずぐ売り切れてしまう。

だが僕はあの悪友がいる。

あいつはなぜかバイトの取ってないところでよく働いている。

どんな技を使っているのだろうか？ そもそも中学生がバイトしたらダメじゃん

ってか落ち込んでるからって僕に地雷を仕掛けないでほしい

そして普通は部活を休んでまで買いに行くか？

まあ、疑問は今置いておこう

「シエア！ 出ておいで！」

そついつとリビングから1匹の猫が出てきた。

「にゃあーん」

「ん？ シェア呼んでどうするの？」

璃波は疑問を吹きかけてきた

「食事前に遊ぼうとおもって」

と、いう嘘を言って僕は自分の部屋に行った

僕の能力の事は家族には話していない。

「よし、シェア、いくよー！」

「にゃ〜」

僕はシェアの頭をなでて、『能力』をつかった

シェアの感覚と僕の感覚を見えない『線』のようなもので繋いでいく。

徐々にシェアの見えている視界が僕にも分かるようになる。

「……よし、」

外見的には、まったく変わらない

でも今は僕とシェア（猫）はすべての感覚がリアルタイムでリンクしているのだ

まあ、リンクは猫によつての強さは違うけど、シェアとは相性が良いんだ

リンクしていると、相手の考えていることは大体わかる

「う、視界が気持ち悪い……」

『んー、にやんだー？ どうしたんにやー？』
シエアはそんな気持ちだった。

簡単に言えば酔ったのだ
その話しは後ですよ

この能力は相手の心もある程度わかる
感覚がリンクしているからね

「シエア、僕に力を貸してくれよ、もちろん、ツナ缶をあげるか

ら

本当は言葉を言う必要はないけど言ってしまう
こればかりは癖だからしかたない

『ツナ缶！？ やる！ よろこんでやるにやあー！』
やっぱりシエアは扱いやすい。

それじゃあ、たのんだよ

了解にや！

.....
シエアが隣の家に忍びこむ。 にやー！眠たいニヤー！

いつものことだ、シエアにとっても敷地みたいなものらしい。
んーと！ やさしい人ー優しい人ー！

それにしてもシエアは体毛が空気をこめて熱いし視界は広いけど
なんとなくしか見えない。

今日も一段と暑いニャー

まるで酷い度の眼鏡をかけた感じだ。

月明かりが明るいニャー

見える世界に色も無いから、なんとなく味気ない。

しかし、髭のおかげですべてが何となくななのに、はっきりと分かる。

それでも人間である僕はとても違和感を覚えてしまう。

人間は僕たちとなにか違うニャー？

うん、ぜんぜん違うよ

猫の感覚は何度リンクしてもなれない。
酔って気持ち悪くなってしまっただ

にゃ？ そんなにちがうにゃ？

しばらく歩いていると家の縁側から足をぶらぶら、させている琴
音を見つける

あ！優しい人にゃー！

俺はシエアに気を引くように『お願い』した。

シエアとはリンクしているだけでシエアの体を僕が動かせるわけ
じゃない

にゃー！言われなくてもいくにゃー！

「にゃーん」

「……？ あ！ シェア」

琴音がシェアを持ち上げ、体をナデナデし始めた

「にゃあー」

ニャー気持ちいいニャー

ん、なんか眠くなってきた 撫でられるは心地いい

「ねえ、シェア、私ね、流神亜を見ると恥ずかしくなって逃げ出しちゃうの」

……これって異性として意識されてるってことかな？

「にゃあん」

にゃあん

残念なのか幸いなのかシェアはこの意味を理解していない。ただ僕にはとても重たい言葉だった。

「あはは、シェアにこんなこと言っても意味無いのにね」

ごめん、とつても意味があったよ

「見られただけなら、恥ずかしいだけで済んだかもしれないけど
……あんなこといわれたら……」

.....

やっぱりあの余計な一言は本当に余計だった……！
僕は何度も頭を机に叩きつけていた。

ガチャッと扉が開く

「おにい！ ご飯できたよ、なにやってるの？」

「い、いや、ちょっと顔ドラムを、」

ダメだ、このごまかし方はダメだ！ なぜこんなごまかし方をしたんだ僕！？

「つと、いうのは冗談だけど何のよう？」

無かったことにして話を進めることにした、

「だからご飯できたよって呼びにきたんじゃない」

「あ、ああ、わざわざごめんね」

「本当よ！ リビングから呼んでも返事ないと思ったら顔を机に打ち付けて、」

「ご、ごめんなさい、見なかったことにしてください。」
本当にいやなところを見られてしまった

シエアのほうに集中しすぎて、まったく聞こえなかった

「あれ？シエアは？」

璃波は聞いてきた。

「どっか行ったよ」

「また髭でも引っ張ったの？」

「ちがうよ」

僕はシエアの髭は今まで一回も引つ張った事ないよ

「ごちそうさま〜！」

「うん、お粗末さまでした〜！」

うむ、璃波はまた料理に磨きがかかったな、十分においしかった。

「結構おいしくなったな〜」

正直に感想を述べた

「一昨日食べたばっかじゃない！もう！」

けどちょっとだけ味が変わった気がする

これならあの食べものに五月蠅い琴音に食べさせても……

「あ〜」

「どうしたの？ おにい？」

「い、いや、なんでもない！」

ヤバイ、琴音のこと忘れた

ってかさっきのショックで感覚が切れてしまった

一度感覚を切断してしまうと、また感覚を共有するために触らないといけない

しょうがない、もう諦めよう。

けれどもシェアのおかげで完全に嫌われてない事がわかった。

それだけでも十分な収穫だ。

これだけの確信があればなんらかのアタックしても問題ないだろう。

明日学校で、仲直りの手を打とうと思う

「よし！ がんばるぞ！」

なぜ今から考えないって？ それはね

「だからどうしたのにおにい？ 今日には本当におかしいよ？」

『僕がおかしい』という誤解を解かないといけないから

第二話 シェアリンク（後書き）

キャラクター紹介

名前 姫流猫 璃波

読み ひめるびょう りな

詳細 流神亜の妹。活発な性格でなんでも全力投球な子

兄のことはシスコンだと勝手に思っている

第三話 暗黒のラブレター（前書き）

今回は短めです

第三話 暗黒のラブレター

「と……どうしよう」

え？ なぜ僕が冒頭から悩んでいるかって？

それはね！

「こ………琴音先輩！ 好きです！ つきあってください！」
「………」

29

時間は少し遡って、学校
靴箱の所で琴音を見かけた。

僕は琴音の手に持っている物を気づいた。

シールで封をされた封筒だ

~~~~~

ってか目を凝らして見たらハートのシールって!?  
どっだけ乙女な男だよ!?

と、とりあえず、暫く、見張ってよう、うん、

あとを着けて居ると屋上に行き着く

くそお……ありきたりな場所を……

僕はバレなよう屋上に侵入した  
そして判りづらい場所に隠れる  
ドアだと気づかれるから窓から入った

少しの時間が過ぎる

ガチャ

っと、音がする

来た……… 琴音に告白しようとしてるのはどこのどいつだ？

聞耳を立てる

「こ……… 琴音先輩！　好きです！　つきあってください！」

こじで冒頭とつながる。

ってか正面に入ってそれが第一発生かよ！？

本当どうしよう、マジどうしよう。

ああああああああああああああああああ

くやし……… こじで僕の恋は終わってしまうのか？

嫌だ、諦めたくない

「こ……… コメンナサイ……！」

あ、そうだった

何を焦ってたんだろう。僕、

今までだって琴音はラブレターを断り続けていたじゃないか

なんでこんなに焦ってたんだろう、

やっぱり、琴音の事好きになってしまったんだ

「はあ……」

僕は悩んでいる。

琴音は今までのラブレターをすべて断っている

つまりハードルが高いつて事だ、

僕はどうすればいいんだろう、

「ふ、また落ち込んでるようだな」

僕は席を立ち教室を出ようとした

「おいおいおい、流神亜、お前なにさりげなく逃げようとし

てるんだよ!?!」

クツ 要のやつ!?!何故今、こんなときに僕に突っかかるのか!?!

「僕は今忙しい!」

言い切つてやった

「まあ、俺が取つておきのギャグを言つてやるよ、」

「アルミ缶の上にあるミカンとか言つたら今度こそ僕教室からでるから」

「なぜバレタ!?!」

「お前のネタは分かり切つてるんだよ!?!」  
周期的に今日がこのネタだとおもつた

「仕方ない、本当に取つて置きネタを披露してやるよ」

「ちょ!?!? ま!?!?」

ダメだ!?! こいつが本気の親父ギャグ言つたらろくでもないことにしかならない!?!

とめないと!?!

しかし遅かった、こいつは教室にいなながらこの階全域に聞こえるような声で

「鏡よ鏡よ鏡さん！」

……なに言ってるんだこいつ？

そう思ったら小さく「てめーは美しくねえよ」と、叫んだ聞こえてきた。

なんなんだ？ なにがあったの？

「はあ！？ お前には分からないんだよ！ 裸エプロンの良さが！」

ダメだ、完全について行けない……

「んじゃあ……僕忙しいから……」

とにかくこの空気を抜け出したかった

「あらら？ ちょっと〜！ その君〜！」  
どっしりぶつ、どっしりぶつやって琴音との元の関係を取り戻そう……

「ねーえー！ きこえてますか〜？」

とりあえず、誤解を解かないと……

「ありやりやく、聞こえてないですね」  
「そもそも、もう元の関係なんて取り戻せるのかな？  
自信なくなってきた」

「正義の鉄拳〜！」

「いたい！？」  
「痛い！？ なんなんだ！？」

「もしも〜し〜？ 聞こえてますか〜？」  
「だれ！？ この人？ もしかしてこの人が殴ったの！？」

「い、いきなり、殴らないですよ……」  
「だれ？ この人？ 知らない人を普通叩くのか？」

「うふふ、ごめんなさい〜、でもあなたが人の話を聞かないから  
悪いんですよ？」  
「だからってなんで急に殴ってくるんだよう、痛い」

「あなた、恋で悩んでるでしょう！〜！」

「しょ〜！？ しょんにゃことありましえん！？」

「動揺してるわね！ うふふ、面白いじゃない〜！」

「いや、ですから、べ、別に、助けが、必要なわけではない、  
んです」

「どうしよう、俺の秘めた思いがばらされてしまう、やばい、どう  
しよう」

「手伝ってあげるわ!」

「ごめんなさい! 本当にばらさないでください!! なんでも  
しますから!」

マジでやばい、ばらされるのはやばい、そんなことされたら永遠  
に琴音と仲良くなれない

「あなた、勘違いしてるわよ」

「……へ?」

勘違い?何を?

「手伝ってあげるって言うてるの、あなたの恋を成就してあげる  
わ」

「いえ、余計なことしないでいいです」

これはおれの問題だ、俺だけで片付けるべきだ、それにこの人面  
白がってる節が

「ねえねえ! この子ね! 好きな人が!」

「ごめんなさい! 手伝ってください! お願いします!!」  
このご好意は素直に受け取るところ。

受け取らないと僕の人生が終わってしまう

「うふふ、素直でよろしいわ!」

素直じゃ嫌なんだけどね、本当に、今死にたくない

「私は2年3組の『阿北<sup>あきた</sup> 姫璃<sup>ひめり</sup>』よ！  
あなたのキューピットを  
するわ！」

と、年下なの……？ この人？

僕のプライドは一瞬にして崩壊した

### 第三話 暗黒のラブレター（後書き）

登場キャラクター

名前 阿北 姫璃

読み あきた ひめり

詳細 初めて見たときから主人公をからかって面白がってる後輩  
根は悪くない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2200z/>

---

キャットセンス

2011年12月15日22時48分発行